

2021年11月14日 降誕前第6主日礼拝(障がい者週間)メッセージ

「惑わされるな!」

水谷憲牧師

聖書 マルコによる福音書 13章 5-13節

私たち人類の歴史は、20万年とも500万年ともいわれますが、そんな私たちのつくりあげている社会は、太古の昔に比べると、技術は進歩し生活も便利にはなりました。太古の昔どころか、2000年前の聖書の時代、あるいは100年前、何なら2年前と比べても大違いです。例えば2年前なんて、こんなふうインターネットを使って礼拝の中継をするなんて、それも大きな教会から小さな教会まで、多くの教会が配信をするようになり、必ずしも教会に出かけることができなくても、自宅から礼拝に参加することができるようになるなんて、それも全国あらゆる場所の教会の礼拝に参加することができるようになるなんて、いったい誰が想像できたでしょうか。礼拝の配信だけでなく、ZOOMというソフトを使ってのテレビ会議のようなものも、今ではもう当たり前になってきました。新型コロナウイルスの世界的な流行という一大事があったからこそその技術の進歩、とも言えます。普段の買い物などに関しては、もっともっと以前からですが、今やもう私たちは、家から一歩も出ることなく、パソコンやスマートフォンでほとんどのことを済ませることができるようになっています。それが本当にいいことなのか悪いことなのかは置いておいても、確かに便利な世の中にはなりました。でも、確かに技術の発展は目覚ましく、便利な世の中にはなってきたけれども、それに合わせて私たちの社会も成熟してきたかと考えると、どうしても首をかしげざるを得ないわけです。なぜなら、いくら文明が進んだところで、ほんのささいな理由、しょもない理由で起こされる犯罪などはちっともなくならないからです。

例えば、最近思い浮かべる大きなところでいうと、先日のハロウィンの夜に、東京の京王線の車内で人を殺傷したジョーカーの事件、「仕事で失敗し、友人関係もうまくいけなくなり、死にたいと思ったが自分では死ねず、死刑になりたかった」。なんだよその理由。そしたらその数日後、それをまねた事件が九州新幹線でおきています。「自殺しようとした」。もう意味が分からない。私たちの社会をとりまく状況は、なかなか成熟しないどころか、むしろすごい勢いで悪くなってきている気がします。大人も子どもも男も女もモラルは低下し、自分の命も人の命も全く軽いもののように傷つけられ、失われています。自然環境保護の地道な努力にもかかわらず、環境破壊の勢いはとてもとどまっているように思えないし、台風や地震等の災害も毎年のようにどこかで起こっています。もちろん戦争や紛争も、無差別テロも、ちっともなくなりません。私たちの住む国も、日本が戦争の反省として固く守ってきたはずの平和憲法を、時代にそぐわないとか現実的でないから変えてしまおうなどと声高に訴える政治家をはじめ、他国や他民族、さらには同じ日本に住む

仲間のことまで、平気で口汚く侮辱する人がネット上でもリアルでも増えてきています。かつて映画監督の宮崎駿さんが「今の子どもたちは大変な時代に生まれてきたものだ」と言っておられましたが、それからかなり時が経った今の子どもたちなんて、もっと大変な時代に生まれてきたものよと感じさせられます。20 世紀末は、終末だ、ノストラダムスだ、2000 年問題だなどといういろいろな話題になりましたが、なんとか乗り越えました。しかし何とか乗り越えたと思った直後、アメリカの同時多発テロが起こり、その後アフガニスタン紛争・イラク戦争へと続いて行きましたし、世紀末をこえてまだ 20 年しか経っていないにもかかわらず、最近は本当に終末が近づいているような気にさせられます。私たちの将来はどうなってゆくのでしょうか。

本日は、マルコによる福音書 13 章、終末の徴についてイエス・キリストが教えて下さっているところです。13 章の冒頭において弟子たちが美しい神殿をほめていた時、イエスが「この大きな建物に見とれているのか。ここに積み上がった石は、一つ残らず崩れ落ちるのだ」と、「形あるものはすべて滅びるのだ」と言わんばかりに神殿の崩壊を予告したので、それに対して弟子たちが「それはいつ起こるのですか。そのことがすべて実現する時には、どんな徴があるのですか」と尋ねたわけです。そしてそれに対して話し始められた部分が本日の箇所です。

弟子たちがイエスに「そのことはいつ起こるのですか」と尋ねたように、私たちにとっても、誰にとっても未来のことは今も昔も大きな関心事です。占いが流行るのも、それがそのような未来に対する興味をある程度満足させてくれるからでしょう。私たちはできることなら、特に自分に関する未来のことは先に知っておきたいと願ってしまいます。それはやはり、私たちが自分たちの将来に対して不安を感じているからです。しかしイエスは、「今年から来年にかけてこれこれこういうことが起こる」などという具体的なことは決して答えられませんでした。弟子たちの質問に対するイエスのメッセージは、ただ「人に惑わされないように気をつけなさい」「自分のことに気をつけていなさい」ということのみだったわけです。イエスは 5 節において「人に惑わされないように気をつけなさい」、9 節において「あなた方は自分のことに気をつけていなさい」、23 節において「あなた方は気をつけていなさい」、33 節においても「気をつけて、目を覚ましていなさい」と、この「気をつけていなさい」というメッセージを繰り返し語っておられます。それは、自分を取り巻く状況に不安を持つかもしれないけれども、決して人に惑わされず、振り回されず、不安定な状況にあってこそ、自分をしっかり持った生き方をしなさい、という弱い私たち、まさに事あるごとに主人を失った羊のように右往左往しがちな私たちに対するメッセージであるように思います。思えば、イエス・キリストの 12 人の弟子たちは、今まさにこの時、これらのメッセージを直接受けていながら、その教えを自分のものとしてきていなかったのです。聞いたようであっても頭に残っていなかったのです。彼らはこの後も相変わらず、自分の弱さに注意することができませんでした。「こ

こを離れず、目を覚ましていなさい」とイエスに言われていたのに眠ってしまったり、「たとえ、みんながつまずいても、私はつまずきません」と言っていたのに、いざとなるとイエスを見捨てて散り散りに逃げてしまったりしました。「たとえ、ご一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」と言い張っていたのに、いざとなるとイエスを罪人とみなす世間の評価に惑わされ、人々にイエスの関係者だと知られることを恐れて「そんな人は知らない」と裏切りの言葉を口にしてしまいました。このように、弟子たちは残念ながら、イエスのメッセージをしっかりと受け止めることができなかつたのです。

この「人に惑わされるな」「自分のことに気をつけなさい(自分のことを大切にしなさい、自分を批判的に振り返りなさい)」といったメッセージを、例えば京王線のジョーカーや九州新幹線の犯人とも、ちゃんと分かち合えていたら、あんな事件は起こらなかつたかもしれない。このようなキリストのメッセージをきちんと分かち合うことこそが、電車の乗客の持ち物検査をするなどといった対策にまさる犯罪予防になるのではないのでしょうか。

「人に惑わされないように気をつけなさい」という言葉に続けて、イエスは言います。「戦争のことや戦争の噂を聞いても、慌ててはいけません。それは必ず起こるが、まだ世の終わりではない」。この当時は、熱狂的に終末を待望する者たち、20世紀末にもそのような人々が現れて大騒ぎをしていましたが、そのような人々がやたらと「世の終わりが来た」と言って人々を不安にし、惑わしていたようです。2テサ2章においてはパウロがこう言っています。「霊や言葉によって、あるいは、私たちから書き送られたという手紙によって、主の日は既に来てしまったかのように言う者がいても、すぐに動揺して分別を無くしたり、慌てふためいたりしないでほしい。誰がどのような手段を用いても、だまされてはいけません」。確かに、戦争の騒ぎや戦争のうわさが世を満たし、さらに地震や飢饉までが起こり始めると「もはや世の終わりが来ている」と考える方が、もしかすると普通かもしれません。そんな状況の中で「もうだめだ、もうすべて絶望だ」とあきらめてしまっても不思議なことではないかも知れません。しかしイエスは、それでも「まだ世の終わりではない」、「これらは産みの苦しみの始まり」なのだと言われるのです。

「産みの苦しみの始まり」だと言うが、ではこの苦しみの先には何があるのか。私もはっきりとは分かりませんが、でもその苦しみの先にはきっと、私たちのキリスト・イエスの言われる神の国があります。今のこの苦しみは神の国の実現のために必要な苦しみの始まりだと希望を捨てずにいたいと思います。母親の出産の苦しみの向うには神様によって与えられた新しい命との出会いの喜びがあるように、神の国の実現を信じる者にとっては、現在自分を取り巻いている苦しみは単なる苦しみではなく、喜びに至る過程としての苦しみの始まりなのです。戦争の騒ぎや戦争の噂も、地震も飢饉も、そして世の混乱も政治の乱れも、神の国の実現へ至るための苦しみの始まりなのだ、だからこれは私たちが乗り越えるべき苦しみ、私たちの乗り越え

ることのできる苦しみのだ、決して絶望的な終りの始まりなどではない、とイエスは言われているように思うのです。絶望的な出来事が次々と続く中で、ああもう終わりだ、だめだな、とあきらめるのではなく、いやこれは乗り越えることのできる苦しみのだ、この苦しみを乗り越えた先に、神様は必ず何か良いものを用意して下さっているのだ、神様は乗り越えられない試練を私たちにお与えにはならない、これは終わりではなく、今こそ「始まり」なのだ、とそうとらえなおして前に進もうとすること、それこそが私たちの主イエス・キリストが私たちを示される世界の見方なのです。

ただ、その苦しみを乗り越えようとする中で私たちは、治安を乱す者として権力者の圧力にさらされるような思いをすることがあるかも知れない、とイエスは言われます。それはまるで、洗礼者ヨハネ、イエス、そしてパウロがそれぞれ権力者に目をつけられ、その前に引き立てられ、迫害を受けたのと同じようにです。さらに、私の名のためにあなた方はすべての人に憎まれる、とイエスはいいます。しかしそれでも心配してはならないとイエスは私たちを励ましてくださる。私たちはどんな時でも、権力者の前に立たされようとも、多くの人から一方的な誤解を受けようとも、私たちのなすべきことは私たちが神様から受けた御言葉を伝えること。すべての命を喜び慈しむイエス・キリストの教えは決して間違っていない。この世を恐れ、誤解を恐れるあまりにイエスの名を恥じてクリスチャンである事を恥じて隠そうとしてはならない。タラントを土に埋めるな。高くかかげよ。世にへつらってイエス・キリストの名を恥じて隠すのではなく、むしろ主イエス・キリストの名を高く掲げて歩む者とされたいと思います。

最後に書いてあるように、今私たちをとり巻いている産みの苦しみがどれほど厳しく辛いものであっても、最後まで（どこまでも）耐え忍ぶ者は、その先に備えられている大きな救いに、豊かな喜びにあずかることができるということを私たちは信じて歩いてゆきたいと思います。耐え忍ぶとは、ただひたすら我慢、辛抱するというのではなく、神様の救い・神様の愛を信じて、希望をもって生きていく前向きな姿であるように思います。そう考えた時、今日の箇所でもキリストが言われたメッセージ——人に惑わされないように気をつけなさい・自分のことに気をつけていなさい——それは実は、これから捕らえられ、引き渡されて裁判にかけられ、鞭打たれ、十字架で殺される運命をたどる自分自身に向けたメッセージでもあったのかもしれないという気がします。その言葉通り、イエスはキリストとして神様の救い・神様の愛を信じて、弟子たちに対しても世界に対しても決してあきらめることなく、希望を持って最後まで耐え忍んだのです。最後は十字架で命を奪われましたが、キリストのその苦しみの先にこそ、復活の栄光があったのだということを思います。

私たちも、将来が確かに不安ですけれども、その不安をかき消すくらいの圧倒的な希望を心に、キリストの名を高く掲げて一緒に歩いていけたらいいなと思っています。